

岩手のホームスピンの昔、今、そして未来

盛岡短期大学部
教授 菊池 直子

1 はじめに

日本工業規格（JIS）の繊維用語によると、ホームスパンは、「手紡績の太い糸を使用して主として平織又は斜文織とし、縮充を行わず仕上げた粗い感じの織物、又はこれに類似の織物。」と説明されています。広辞苑も同様の説明であり、全国的には、手紡ぎ手織りの毛織物、あるいは手織りに類似する外観の機械織りツイードを称しています。一方、“岩手のホームスパン”は、伝統的な手仕事の毛織物を、機械織りツイードと区別して称することが多く、岩手で育まれた文化として理解されています。

本講義では、岩手のホームスパンについて、製作工程、特性を説明した上で、英国生まれのホームスパンが日本でつくられるようになった背景や、岩手に産地を形成した歴史を説明します。そのあと、現在の様子を述べ、まとめとして岩手のホームスピンの未来を考えたいと思います。

2 ホームスピンの製作工程

ホームスピンの風合いや品質は、毛質に起因するところが大きいため、製作は、羊毛の選別から始まります。マフラーやショール等は繊維が細く

柔らかい羊毛が適し、服地等は繊維長が短く弾力に富む羊毛が適します。また、同じ羊種でもその時々によって毛質が異なるため、羊毛の状態を確認しながら要求される風合いに適した使い分けやブレンドが行われます。選別した羊毛を、フェルト化させないように注意して汚れを洗い落とし、原毛で煮沸染色します。染料は、化学染料と天然染料（植物染料、動物染料）のどちらも使用されますが、天然染料のときは、色素と繊維を化学的に結合させる媒染を行います。色合いは、媒染剤の種類や、先媒染（染色前の媒染）か後媒染（染色後の媒染）にかによっても変わります。染色後、自然乾燥させ、絡み合った毛の塊をほぐし、繊維の方向を揃えるカーディングを行います。この工程は、羊毛の色を混ぜ合わせる作業も兼ねています。ホームスパンは、多いもので10色以上を混ぜ合わせることもあり、複数の色が混在することでホームスパン特有の面白みが表れます。

カーディングした羊毛を紡ぎやすい幅に割り裂き、羊毛の流れにそって撚りをかけていきますが、この紡ぎ糸をホームスパンでは梳毛糸といい、マフラーやショールに適した紡ぎになります。服地の場合は、カーディング済みの羊毛を薄い層にはがし、それをくるくるとロールさせたものから羊毛をコイル状に引出して紡ぎます。この糸を紡毛糸といっています。

ホームスパンの糸は、ほとんど単糸ですが、用途やデザインにより緯糸に双糸を用いることがあります。紡いだ糸を木枠に巻き取り、蒸して撚りを止めます。ホームスパンの製作期間のおよそ8割が、この糸作りに使われます。

整経を経て織りますが、服地4m程の場合、集中すると1日で織ることも可能です。織り上がった布は、縮絨加工が施され柔らかさが

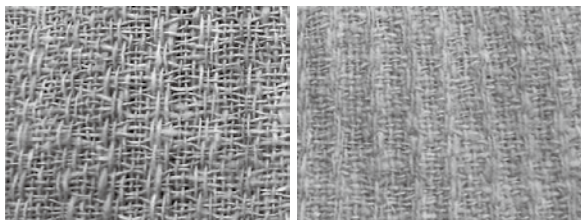


図1 縮絨前（左）と縮絨後（右）

増し、繊維が絡み合って毛羽が表面を覆い、ふんわりした外観が得られます。図1は、縮絨前と後の外観変化を示しています。

3 ホームスパンの特性

ホームスパンは、“軽くて暖かい”、“弾力がある”とよく言われますが、特性を定量的に示したものはみあたりません。そこで、保温性、圧縮弾性などの各性能について、無作為抽出した服地用途のホームスパン22種と機械織りツイード26種を実験検証してみました。

3-1 “軽くて暖かい”の検証

保温性は、KES-サーモラボⅡ（カトーテック製）を用い測定しました。

各試料の保温率について、布の厚さとの関係で示すと図2のようになります。保温性は、空気の含有量に影響されたため、厚地になるほど大きいことが認められます。厚さはどちらも0.5~1.7mmの範囲ですが、保温率はホームスパンが大きく、特に薄地はその傾向が顕著です。保温率の平均値は、ホームスパン43.5%、機械織りツイード36.8%で、両群に有意差（有意水準0.1%）が認められました。ホームスパンは、空気を多く含み保温性が大きいといえます。

図3は、保温率と質量の関

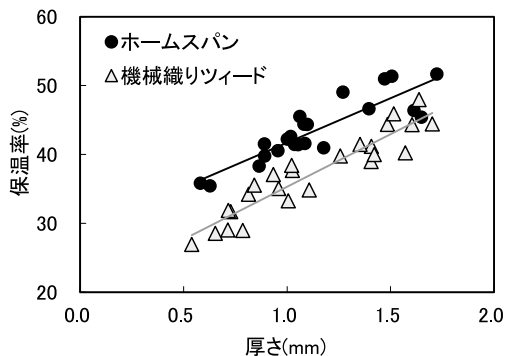


図2 厚さと保温率の関係

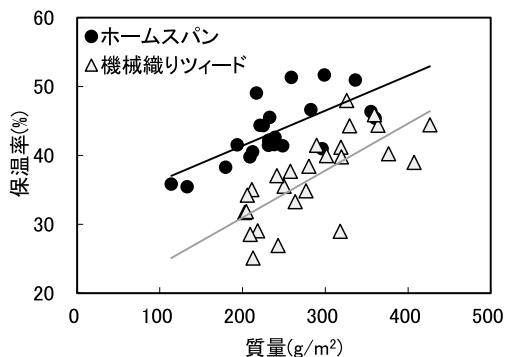


図3 質量と保温率の関係

係を示しています。質量の平均値は、ホームспан242±62.5g/m²、機械織りツイード285±66.0g/m²で、ホームспанが有意に軽量（有意水準5%）であることが認められました。同じ質量で比較すると、ホームспанの保温性が大きく、ホームспанは“軽くて暖かい”特性を有するといえます。

3-2 “弾力がある”の検証

圧縮弾性は、JIS L1096に準拠し測定しました。図4は、各試料の圧縮弾性率を度数分布で示しています。ホームспан、機械織りツイードとも85.0~92.5%の試料が多く、圧縮弾性率の平均値は、ホームспан88.2%、機械織りツイード88.0%で、両群に有意差が認められませんでした。これは、ホームспанも機械織り

ツイードも基本的に羊毛素材のためと考えられます。しかし、羊毛の組成割合は、試料によって様々です。そこで、羊毛の組成割合と圧縮弾性率の関係を図5に示しています。相関係数は、ホームспан0.48（有意水準5%）、機械織りツイード0.67（有意水準1%）であり、どちらもかなりの正の相関が認められました。羊毛の組成割合は、圧縮弾性を支配する一因といえます。これにより“弾力がある”は、ホームспанに限らず羊毛素材の特性といえます。

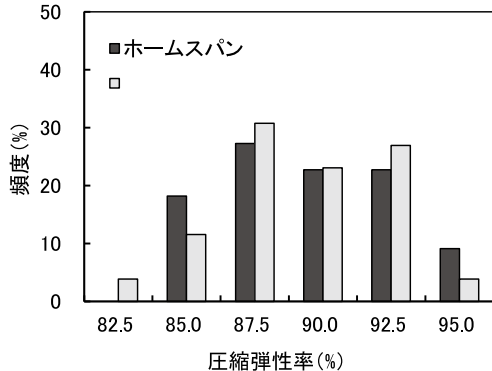


図4 圧縮弾性率の度数分布

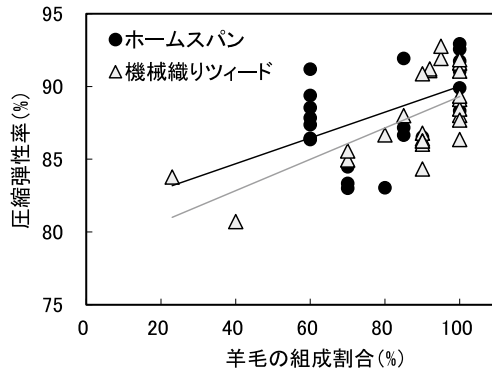


図5 羊毛の組成割合と圧縮弾性率の関係

4 ホームスピンの歴史

岩手のホームスパンのはじまりは、国の緬羊振興と関わります。そこで、まず、緬羊振興の国策について楠本雅弘氏の解説をもとに歴史的に概観し、その上で岩手のホームスパンの歴史をみていきたいと思います。

岩手県がホームスパン産地を形成した要因には、他の道府県との違いに注目すると、県の公設試験研究機関による支援と指導者の存在があったと考えられ、本講義では、それらを中心にお話したいと思います。

4-1 日本の緬羊振興策とホームスパン

楠本氏は、近代における政府の緬羊振興策に先立ち、その前史として、江戸後期から羊毛製品の輸入が急増し、幕府が金・銀の流失を抑えるために緬羊振興に取り組んだことや、その取り組みが半年から数年で消滅したことを説明しています。

明治維新以降は、近代国家樹立のため、軍服や警察官、鉄道員等の制服用の羊毛の需要が急増しました。政府は、羊毛の自給体制を目指して牧羊事業を推進し、また、日本初の毛織物工場の千住製絨所を明治12年に操業させました。しかし、牧羊事業は、わずか13年で打ち切れ失敗に終わりました。原因は、外国を模倣した放牧飼育が日本風土に適さなかったこと、繁殖技術や治療技術が未熟だったこと、寄生虫が蔓延したことなど多々挙げられています。日本は、羊毛需要が急増する中、もっぱら輸入に依存せざるを得ませんでした。

しかし、第一次世界大戦が勃発すると、英国が属領のオーストラリア・ニュージーランドの羊毛輸出を禁止したため、両国からの輸入に依存していた日本は、たちまち羊毛不足に陥りました。政府は、再び羊毛の自給体制を目指し、大正6年に緬羊増殖計画を立案しましたが、この計画もわずか7年で頓挫しました。理由には、戦後の不況に伴う行財政整理や国際羊毛市場の再開があったようです。予算規模は大幅に縮小されましたが、農家の副業奨励が継続されたことによって緬羊飼養と羊毛加工のホームスパ

ンは普及していきます。農林省畜産局は、『羊毛家庭紡織法』を大正15年に発行し、また、全国各地でホームスパン講習会を開催し、綿羊飼養に伴うホームスパンの発展を推進しました。

昭和期に入り、経済恐慌の悪影響を受けて農村は深刻な苦境に立たされました。救済するための農村経済更生運動が昭和7年にはじまり、綿羊飼養に取り組む農家が増え、それに併せてホームスパンが農家の副業として全国的に発展しました。図6は、戦前における各道府県のホームスパン生産量と綿羊飼養頭数を示しています。北海道のホームスパン生産額は、綿羊頭数とともに国内最多で、相当普及していたことが理解できます。福島県のホームスパン生産額も、岩手県を越えています。北海道に比肩するほどの綿羊頭数を示し、戦前におけるホームスパン産業が盛況であった様子が窺えます。岩手県の生産額は、国内3位です。岩手に継承されるホームスパン産業は、戦前から基盤づくりされていたことが認められます。

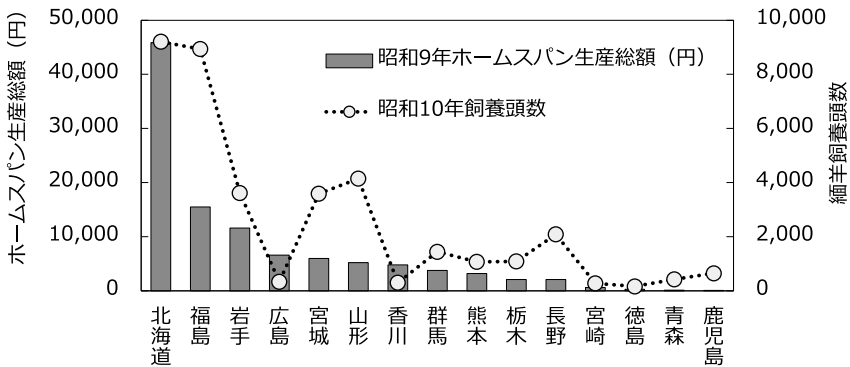


図6 昭和9年のホームスパン生産額と昭和10年の綿羊飼養頭数
(岡本正行『理論實際』, 賢文館, 1937年より作成)

4-2 ホームスパン産業に関わる岩手県の支援事業の歴史

公設試験研究機関は、地元の産業振興に寄与することを目的とし、試験研究や技術指導、情報提供、設備貸付等の種々の事業を行っています。岩

手県では、ホームспан等の繊維関連産業に対し、歴史的に岩手県工業技術センターがその役割を担ってきました。工業技術センターの繊維部門の変遷をみると、明治9年の機業所設置から昭和17年の染織部廃止までの66年間、県は繊維産業を支えてきたことが確認できます。敗戦後は、昭和23年に繊維工業部が再建され、28年間にわたって繊維産業を支援してきましたが、昭和51年に部門統合が行われ、事実上、規模が縮小されました。平成13年に繊維関係の専門研究員が不在となり試験研究が終了しましたが、これは産業振興を目的とする支援事業の対象から繊維業界がほぼ除外されたことを意味します。これ以降、工業技術センターは、既存設備のホームспан仕上げ加工機械の貸付業務のみとなりました。しかし、平成24年、ホームспан仕上げ加工機械が故障し使用不可になると、繊維に関わる既存設備の貸付業務もすべて終了しました。

ホームспан産業への県の支援事業に注目し、公設試験研究機関が発行した報告書を遡ると、県がホームспанに取り組んだ最初の記録は、昭和3年度、陸軍特別大演習のときに試作した服地を献上したというものでした。翌年度以降、県内の綿羊が増加していることを背景に、多量の雑種羊毛を利用する試験や、農村におけるホームспанをさらに推進させる指導が行われました。昭和5年度は、販売数量が前年の3倍を超え、産業組合を組織し事業発展を期待していること、製品の規格統制を計画していること等が報告され、産業として発展する過程が認められます。昭和6年度は、統一性ある色調を製出するための実地指導を行ったことが報告され、工業製品として色調をコントロールする技術が求められていたことが窺えます。昭和13年度は、繭毛や藁綿等を混紡したホームспанが製織され、実用性能の強度試験や光による褪色試験が行われました。羊毛が軍需品のために利用できず、品質の劣る混紡織物がホームспанの名で市場に出回る時代でした。昭和14年、商工省が国産羊毛の購買制限令を公布したことにより、県はホームспанの支援事業を中止するに至りました。

ホームスパンが好転した契機の一つは、表1に示す仕上げ加工機械が昭和25年度に県に設置されたことでした。ホームスパン業界の要望に応え、県が高額な費用を投じたことは、ホームスパンの産業振興にかける県の強い意気込みの表れといえます。

図7は、仕上げ加工機械の使用記録から算出した服地生産

量の推移を示しています。昭和41年度まで生産量が飛躍的に伸び、昭和51年度のピーク時は34,000mを超えました。経済の高度成長期に入り、人々の生活が豊かになるにつれてホームスパンの需要も高まったと考えられます。大量のホームスパンを生産するにあたり、仕上げ加工機械が、産業振興に大いに貢献したことは明らかです。県は、本場の英国産ホームスパンを目標とする試験研究や流行色に関する試験研究を行っており、高品質でおしゃれなホームスパンを業界に指導していました。

しかし、昭和51年度以降、生産量は減少の一途を辿りました。県は、昭和58年頃から水溶性繊維を利用した無撚に近い特殊ホームスパンや強撚を工夫した伸縮性ホームスパン等、新しい趣向のホームスパンを開発しましたが、服地生産量の減少に歯止めをかけることができませんでした。服地

表1 ホームスパン仕上げ加工機械

装置	機能
洗絨機	織り上げた毛織物の汚れや油脂を洗剤を使って除去する
縮絨機	毛織物を石けん液などで湿らせた状態のものを揉んで織組織を密にする。縮絨により柔らかさが増し、繊維が絡み合っ毛羽が表面を覆い、ふんわりした外観が得られる
煮絨機	湯の中でローラーに巻いた毛織物を、上側のローラーで押し付けてから急冷し、後でシワがつかないようにセットする。光沢をつける
幅出乾燥機	所定の布幅に整え、熱風で乾燥する
剪毛機	毛織物の表面に出ている毛羽を、カッター（円筒形のローラーの表面にらせん状に取り付けられた刃）とナイフ（平板型の刃）の間で刈り揃える
刷毛機	毛屑などを除き、毛羽を同一方向に伏せる
蒸絨機	毛織物を厚手綿布と一緒に蒸気噴出孔のあるローラーに巻き込み、蒸気で毛織物をセットする。蒸気アイロンの役割をする

の需要の減少は、注文服から既製服に移行した時代の流れによるものであり、品質改善や技術改善の指導を以てしても業界の状況を好転させるには限界があったといえます。ホームспан業界は、主力製品を服地からマフラー、ショール、ネクタイ等の小物類に移し、服地の売り上げ減少分を補填したようです。各企業、各工房が、生産品目の主軸をどこにおくか、生産方針の転換を求められるような時代であったと考えられます。

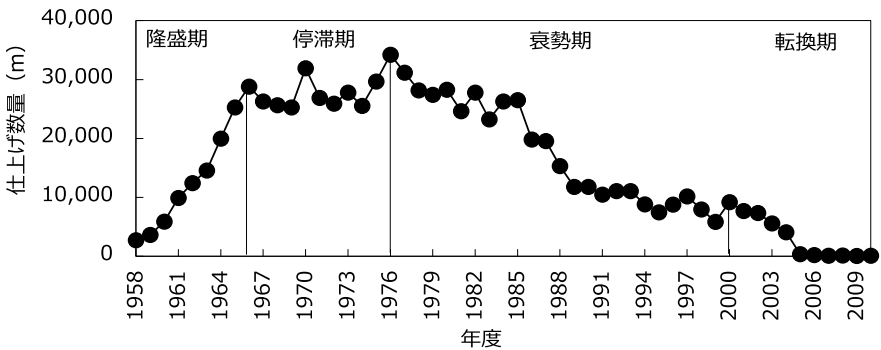


図7 昭和33年度以降のホームспан服地生産量の推移

4-3 ホームспанの指導者 及川全三

岩手県のホームспанの素地を築いた人物のひとりに及川全三（明治25～昭和60年）が存在します。大正末期に民芸運動を起こした柳宗悦より、英国の染織家エセル・メレのホームспанをみせられ、染織工芸の道を勧められました。及川は、元々小学校教員でしたが、昭和2年に慶応義塾幼稚舎教員を辞職して以降、植物染料による羊毛の染色方法を独学で会得し、昭和9年に帰郷（現在の花巻市東和町）してホームспанで民芸運動を実践しました。及川は、昭和23年に国画会工芸部の会員となり、国展への出品をライフワークにするなど、工芸家として活躍しました。及川は、58歳の頃に雑誌『民芸』に寄稿した中で、日本のホームспанについて次のように述べています。

「ホームスパンという毛の手織の仕事は、日本では新しい仕事なのである。それがまた正しく西洋のホームスパンの伝統を受け継いだというでもないものであつて、ここで新しく伝統を開いて、それが日本の民芸になるかどうか、全く今後のことといつていい、そういうものである。」

美しいホームスパンをつくり、それが民芸としてあり続けることを期待していたことが窺えます。

5 岩手のホームスパンを継承する人々

現在、盛岡市や花巻市などに製作拠点をもつ会社や工房が、次のような独自の姿勢でホームスパンを製作しています。

- ・英国羊毛にこだわる伝統的なホームスパンの製作
- ・マフラー、帽子等の小物ホームスパンの製作
- ・後継者を育成しながら、民芸の思想「実用と美」を貫くホームスパンの製作
- ・天然染料によるホームスパンの製作
- ・ホームスパンを含め、独創的な織物の製作
- ・ホームスパンや、紡績糸による手織りツイードの製作
- ・広幅でホームスパン風のざっくりした機械織りツイード（服地）を主軸に置き、一部商品についてのホームスパンの製作

それぞれの方針、考え方があり、製作されるホームスパンも様々です。この多様性が、時代の変化にしなやかに対応することを可能にし、岩手県に根強く継承することを可能にしてきました。

ここで、昨年度の学生が、個人で工房を構えて活躍する植田紀子氏、田中祐子氏、森由美子氏に卒業研究として聞き取り調査を行いましたので、その一部を紹介したいと思います。

ホームスパンの魅力のひとつは色彩ですが、植田氏のホームスパンは、

植物染色による複数の色糸が組み合わせられ、色彩のハーモニーの美しさが特長です。田中氏のホームスパンは、キュートできれいな色彩が特長です。一見すると無地に見えますが、複数の色の羊毛を混ぜて表現した色には、深みがあります。森氏のホームスパンは、中間色のシックで美しい色彩が特長であり、優しく洗練された印象を与えます。色彩は、三者三様であり、作り手によって表情を変えるところが、ホームスパンの魅力といえます。

機械生産品が溢れる中でホームスパンを作り続ける意義について質問したところ、植田氏は、「機械生産のものは、あまり大事にされないように思う。人の手で作られるものは、自分の欲しいものを選んで大切にしようとするのではないだろうか。手仕事のものには、そういう力がある」と話しました。田中氏は、「機械生産で作られたものと手仕事で作られるものは別ものであり、比較も否定もしない」といい、「良いものを長く着ることは、お金に換えられないものである」と話しました。森氏は、「機械生産を否定するわけではないし、安価の物も必要である。ホームスパンと機械生産の毛織物では、空気の含有量が違うので温かさが異なる。ホームスパンの素材感や温かさ、手仕事の良さを知ってもらいたい」と話しました。

手仕事の染織が衰退していく現代において、ホームスパンを生業として事業継承することは容易ではありません。しかし、手仕事にはものを大切にしようとする力があり、機械生産とは別の価値を生み出していることを教えられました。

6 岩手のホームスパンの未来

岩手には、ホームスパンの確かな技術が根付いており、作家や工房が、新たな創作に挑み続けています。岩手のホームスパンを未来へ継承するための要件をあげるならば、次のことが考えられます。

- ・美しさがある
- ・その時代の生活（暮らし）に適応する

- ・ 合理性がある（ホームスパンでなければ得られないことがある）
- ・ 技術が受け継がれている

岩手のホームスパンが継承される意義は、手仕事の美しさにあります。ホームスパンは、素材、風合い、色柄、デザインをとおして作り手の感性に触れることができるものです。価値観、美意識がますます多様化すると考えられる未来において、ホームスパンが多様な感性に響く存在であることは、極めて重要です。その時代の生活に適応し、使う人にとってホームスパンでなければ得られない価値、合理性があるならば、また、手仕事の技術を次世代に受け継ぐことができるならば、ホームスパンは岩手の文化として未来へ継承されると考えています。

しかし、課題は山積しています。岩手でもホームスパンを知らない人が増え、特に、若者に知られていないことは否めません。また、岩手の文化という認知度が、ますます低下していることも憂慮されます。ホームスパンを未来へ継承するためには、若い世代へのアプローチが必要であり、岩手の文化として理解するための広報活動が必要と考えています。今後は、岩手のホームスパンを、文化として未来へ継承するための方策に関する研究に取り組んでいきたいと考えています。

【主な参考文献】

- 1) てくり別冊『岩手のホームスパン』, まちの編集室, 2015年
- 2) 森由美子『ホームスパンテクニック』, 染織と生活社, 2002年
- 3) 楠本雅弘「わが国における緬羊振興政策の歴史と課題」, 『羊は未来を拓く一記録集・羊シンポ'89・盛岡一』, 1990年
- 4) 梅原五朗「岩手ホームスパンの歩み」, 『染織と生活』, No.19, 1977年
- 5) 及川全三「岩手のホームスパン」, 『民芸』第68号8月号, 日本民芸協会, 1958年